



さあ、答え合わせをしよう！

Vol.74 調べてみよう～生活文化「道具」②

※ココを見てね! ▶調べてみよう～生活文化「道具(どうぐ)」

1. 縄文時代早期に流行(りゅうこう)した土器につける文様(もんよう)で、棒(ぼう)や縄(なわ)ヒモを巻き付けた棒をくるくると回転させてつける文様のことを何といいますか？

正解:②押型文(おしがたもん)

人類(じんるい)の生活は、土器(どき)の登場(とうじょう)により とても便利(べんり)になりました。土器は、鍋(なべ)として使うことで、そのままでは食べられなかった(または食べにくかった)肉や木の実なども食べられるようにしてくれたし、保存容器(ほぞんようき)としても使われました。そうした機能(きのう)だけでも十分ですが、大昔の人々は、その土器にいろんな文様(もんよう)をつけました。自分のものだとわかるようにしたかったのか、もっと美しくしたい! という美的(びてき)センスのあらわれだったのか—そして、道具を開発(かいはつ)した次は、その道具をより使いやすく工夫し、美しくしました。こうした発想(はっそう)は、モノづくりの原点(げんてん)として現代人にも受け継(つ)がれていますね。絵画(かいが)や音楽(おんがく)といった文化(ぶんか)・芸術(げいじゆつ)も、その延長線上に(えんちょうせんじょう)にあるのかもしれませんが。さて問題の、縄文時代(じょうもんじだい)の文様(もんよう)は、②押型文(おしがたもん)。「櫛描文(くしがきもん)」は弥生時代前期(やよいじだいぜんき)に、「直狐文(ちよっこもん)」は古墳時代以降(こふんじだいいこう)に登場(とうじょう)します。

2. 斜面(しゃめん)に穴を掘り、天井をかけた窯(かま)の中で、高温で焼いた土器は、次のうちどれですか？

正解:③須恵器(すえき)

丈夫(じょうぶ)で、水が漏(も)れにくく、貯蔵具(ちよぞうぐ)や食器として活躍(かつやく)した土器(どき)と言えば、③須恵器(すえき)が正解です。須恵器(すえき)をつくるにはたくさんの人手と燃料(ねんりょう)、高い技術(ぎじゆつ)が必要(ひつよう)であったため、各地(かくち)の有力者(ゆうりょくしゃ)が、工房(こうぼう)や専門(せんもん)の職人(しょくにん)を集めてつくらせたと考えられます。これに対し、土師器(はじき)は弥生土器(やよいどき)の流れをくみ、古墳時代(こふんじだい)から奈良(なら)・平安時代(へいあんじだい)まで生産(せいさん)された素焼(すや)きの土器(どき)です。

3. 古墳時代に登場した道具の話で、水を沸かす「甕」。では、食べ物を蒸すのに使われたものは、何かな？

正解:②甑(こしき)

弥生時代(やよいじだい)になると、米づくりとともに、朝鮮半島(ちょうせんはんとう)から新しい文化や技術(ぎじゆつ)が伝わり、土器(どき)もまた変化してゆきました。そのながれは古墳時代(こふんじだい)へと続き、住居(じゅうきょ)の中にすえたカマドで米を蒸(む)す調理(ちょうり)方法が広まり、水を沸騰(ふつとう)させるための「甕(かめ)」と食べ物を蒸(む)すのに使われた「甑(こしき)」がしだいに広まっていきました。正解は、②甑(こしき)です。ちなみに、「貯蔵穴(ちよぞうけつ)」は食料を保存しておくための倉庫(そうこ)で縄文時代(じょうもんじだい)から使われています。また、「特殊器台(とくしゆきだい)」とは、弥生時代(やよいじだい)の墳丘墓(ふんきゅうぼ)に見られる祭りに使われていた土器(どき)の台のことで、吉備地方(きびちほう)／いまの岡山県と広島県東部に多くみられます。